随筆

馬鹿は死んでもなおらない！
～真壁の千人壕潜入記～

長嶺胃腸科内科外科医院
長嶺　信夫

1. これで終わりか！

足が必死に宙を蹴っている。泥まみれの手が岩棚からすべり落ちてくる。

だめだ！このまますべり落ちたら3メートル下のゴツゴツした岩の上に落ち、さらに1メートル斜め下のくぼみに転がり込むことになる。細心の注意をはらっても打撲はまぬがれない。へたをしたら骨折だ！

だがあきらめるわけにはいかない。いや絶対あきらめない！目をつぶり、必死にこらえながら、足を前後左右にゆらし足場を探す。

岩棚に必死にしがみついているものの、指がすべって、体重を支えることはできない。いよいよ、観念しなければならないのか！手が滑る!!

すべり落ちる・・・まさにその時、宙を蹴っていた左足が側の岩壁から突き出ていた小さな突起物（ようやく片足が乗るほどの小さな岩の足場）に触れたのである。天の助けとはこのことか！足をのせるとしっかりした岩であった。・・・ああ、命拾いした！・・・一息つき、左足で体重を支え、あらためて周囲を見渡す。ヘッドライトが頭の後方にすだれ状に垂れ下がっていた鍾乳石を照らしだした。岩棚の上から右手を離し鍾乳石で身体を支える。下方を確認、慎重に岩の上に飛び降りた。

写真1．真壁の千人壕。自然の鍾乳洞を利用し通路は掘削されているが、まわりに横になって休める場所はない。

2. しまった！トンネル通路が冠水？

ライトに照らし出された鍾乳洞のドームは広さ4×10mほどの長楕円形の空洞で内面は鍾乳洞特有、ごつごつしていて、くぼみにそってチョロチョロと水が流れていた。流れに沿って進むとドームの前方は小さな水溜りになっていて、その上に岩がおおいかぶさっている。エッ！これは大変なことになった！洞窟の中をさまよっているうちに地下に浸透した梅雨期の増水でトンネル通路が冠水したにちがいない。このままでは潜水してこの通路を通らなければならない。困った！カメラも完全にダメになる。しかし待てよ！入ってきた時、これほどのくぼみの通路を通ってきただろうか？

おかしい！どうみてもおかしい！ひきかえし、岩棚から降りた場所まで後戻りして考え込む。懐中電灯の電池は大丈夫だろうか？ライトを消してみる。当然のことながら闇の世界で自分の鼻先さえ見えない。・・・ここから出られなかったらどうしよう！・・・降りてきた岩棚を見上げる。こんな高い岩棚を乗り越えて中に入って行っただろうか？やはりおかしい！そんなはずはない！ふたたび水溜りへひきかえし、足先を使い水底の確認をはじめた。もしトンネル通路が冠水したのであれば人が通れる形態をしているはずである。急な深みにはまると危険だ。慎重に足先で探るも水深は浅く、水底の岩は前方の岩に移行していて行き止まりになっていた。

ここは入ってきた道ではない！急いでライトで照らし出されたほかのくぼみをのぞくも総て行き止まりであった。やはりそうだ！このドームは入ってきた通路の鍾乳洞ではない。迷い込んだのだ！

写真2. 千人壕の中。戦時中、ローソクやランプのかすかな光をたよりに避難していた。写真はストロボで照らし出されているが、実際は懐中電灯の光も闇に吸い込まれる暗黒の世界である。

3. 迷路からの脱出

そうとわかったら、今度はこのドームを脱出し、もとの場所に戻らなければならない。降りてきた岩棚を見上げる。天井岩の下に棚状に岩がせりだしているが、その上にある通路は見えない。考えてみると、鍾乳洞に入ってきた時、見えない通路の方向へ岩をよじ登り奥に進むことはありえない。どうして早くそれに気付かなかったのか！

降りた時利用した小さな足場に左足をのせ、すだれ状の鍾乳石を支えに、岩棚に手をのばす。足場から岩棚までの高さはようやく手が届く高さである。手を添えるだけでは指がすべって登ることができない。両手の親指を岩棚上の粘土にねじ込み、力を込めて、まず右の肘を棚上に持ち上げ、続いて左の肘をのせた。これで両腋から上が棚上に出たことになる。しばらく息を整え、全身を棚上に上げなければならない。しかし棚上40センチにはゴツゴツした岩の天井がある。勢いをつけて上がることはできない。さきほどの親指を抜き、さらに前方の粘土の中に右親指を奥深くねじ込み、右腕に力をこめ、右胸の中ほどまで身体をもちあげ、それに続いて左側のからだも左胸中央まで持ち上げることができた。頭が天井につかえるため一回の動作はこれが精一杯である。しかしまだ安心はできない。まだ胸の中ほどから下は宙ぶらりんである。さらに息を整え、今度は肘を使い、ウエストまでからだを持ち上げる。肩からたすきがけにした大型の懐中電灯と愛用のキャノンカメラが腰の横で泥まみれになりながら岩棚にゴツゴツ音をたててぶつかっていた。

・・・やれやれこれで生還できる！・・・はげ頭を天井岩にぶつけながら、やがてドームに迷い込む前の位置まで這い出ることができた。

4. 出口はどこ？コウモリ・ドームは？

しかし、これで総て済んだわけではない。この場所からさらに出口を見つけ出し、壕の外に出なければならない。ここから壕の出口までには途中コウモリが巣をつくっている鍾乳洞のドームやゴツゴツした岩の間に小川が流れている場所があったではないか。

同じ場所を行きつ、戻りつ、足跡や記憶にある岩の形状を確認しつつ、慎重に出口を探す。ヘッドライトで足元の安全を確保し、たすきがけにつるした大型の懐中電灯であたりを照らし、両手で岩をつかみながらである。足元の岩の間は所によって2～3メートルの深さの隙間があり、水が流れ、岩や石筍は泥におおわれ、したたり落ちる水で滑りやすくなっている。その場所では平坦な岩はほとんどなく、丸みをおび、または斜めに傾いていて、滑りやすい。ゴム製の雨靴を履かないでよかった。雨靴はこしがないうえ、泥土ではよく滑る。今回は、トレッキング・シューズを糸満の荒崎海岸で駄目にしたので、そのかわりに足関節から20cm上方までを保護できる皮製のバイク・シューズを履いてきた。ライトを二つ持参したのも正解だった。登山用に購入していた防水のヘッドライトと大型の懐中電灯を併用しなければとても前に進むことはできなかっただろう。それにしてもなかなか出口が見つからない。しばらくその場に立ちつくし、思案に暮れる。

ようやくライトがぼんやりとドームの出口を照らしだした。出口の穴の部分だけライト

写真3．コウモリ・ドームの中。小型のコウモリで、文献には「リュウキュウユビナガコウモリ」と記載されていた。

写真4．入口から30mの地点。強固な岩のトンネルでできていた。

の光が闇に吸い込まれ、周りに比べ、暗くなっている。迷い込んだ鍾乳洞から元の場所にもどり、出口を探しはじめてから20分後のことである。足元に注意しつつその方向へ足を進めた。周りの岩は入ってきた時の記憶のままである。まちがいない!?

やがてコウモリ・ドームにたどりつき、さらに小川が流れるドームを過ぎ、見慣れた昔懐かしい（？）通路を通り、明るい太陽のもとに出ることができた。生還（？）した時、頭から靴先まで泥まみれ、ズボンは裂け、愛用のカメラにいたってはレンズ・フードの中に泥が充満し、中から丸いアイスクリームのように外に飛び出していた。

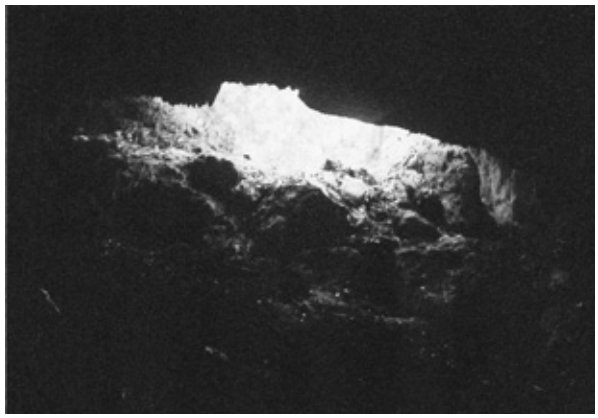

写真5．千人壕の中から外界を見る。

足腰が弱った上、家内にも見捨てられ、登山もできなくなったので、今度は地下に潜ることにしたのだが、これ以上潜りつづけると地獄まで落ちることになるかもしれない。家内は「インドに行ってから頭がおかしくなった！」と言い、「馬鹿は死んでもなおらない！」などとあきらめ模様である。

糸満市真壁の千人壕：第二次世界大戦中、当時の真壁村の住民や南部に避難・撤退してきた住民、兵隊が使用した自然洞窟壕で隣接してこの地で玉砕した野砲第42連隊、野戦重砲第1連隊、独立重砲兵第100大隊の慰霊碑および萬華の塔が建っている。JA糸満市集出荷場真壁支所向かいの慰霊碑の右側から壕にいたる道がある。手記は2006年6月4日戦時中の壕を調査するため千人壕に入った時の記録である。戦時中の壕や洞窟の調査は単独では危険なので、同行の士を求めているのだが、誰も相手にしてくれない。奇人·変人以外相手にする人はいないのかもしれないが、戦争など既に忘れ去られた存在なのだ。今回の調査の前に2005年11月13日に予備調査のため壕の中ほどまで入っている。

（2006年6月慰霊の月に記す）